
日本の武道文化の成立基盤 ——新陰流と一刀流剣術の研究を通じて

研究代表者 魚住孝至*
共同研究者 吉田鞆男**、仙土克博**、立木幸敏*
大保木輝雄**、朴周鳳*、中嶋哲也****
長南信之**、宮本光輝**
*国際武道大学、**古流剣術研究会、***埼玉大学、****鹿児島大学

プロジェクト研究の目的と二〇一三年度の実施状況を報告した上で、本年度の研究成果として、以下の二つの論稿を掲載した。

新陰流の確立——柳生宗厳発給の伝書に即して

魚住孝至

新陰流は、上泉伊勢守信綱（一五〇八？～一五七三）により創始され、その直弟子たちによって多様な展開を見せたが、新陰流として後々まで大きな影響をもたらしたのが、柳生宗厳（一五二九～一六〇六）に始まる新陰流であった。宗厳は上泉の思想を受け継ぎながら、流派の形の整備を行い、独自の思想を表現した目録・伝書を作成し、後代に大きな影響を及ぼした。息子で将軍家兵法師範となった柳生宗矩の『兵法家伝書』は、術技は宗厳の目録に則り、その思想も宗厳が遺した伝書の条目を宗矩流に解釈・解説したものと言えるものであった。

本稿は、最初に宗厳の生涯をその時代背景の中で捉えた上で、宗厳が最初に発給した天正八年（一五八〇）前後の伝書、勢法を整備した慶長元年（一五九六）の目録、徳川の覇権が確立して流派の発展が見込まれた慶長六年（一六〇一）以降の伝書に即して、流祖・上泉から受け継いだものと、宗厳が付け加えて整備したものを明確にするとともに、宗矩へと伝承されていくものに注目しながら、新陰流が確立する過程を考察した。柳生宗厳こそ、上泉に始まった新陰流を整備して確立し、近世社会に定着させるのに決定的な役割を果たしたものであることを明らかにした。

新陰流の体系の根幹 “転（マロバシ）” について

吉田鞆男

“^{マロバシ}転”の理念とその意を表現する勢法は、新陰流の体系の根幹と成っているとされる。けれども“転”の代表例である小転、大転、是極、合ッシ打ちなどの勢法から受ける“転”の様子と、流祖・上泉伊勢守の伝書にある「転変」との間には少し違和感が感じられる。伝書の表現では、身を転変させ、懸待表裡の中に勝ちを得る刀法と思われるが、自らの流儀を精神性の高い人間学的思想である自負する上泉は、転変する中から、相手の動きの芯に^{ナカズミ}中墨をはづさず打ち込むことを大事とし、敵の太刀筋に踏み込んで信念の一刀を切り出す刹那の人間の姿に、人間の尊厳を見ていたのではないか。“^{マロバシ}転”にこのような意味を籠めて、上泉は自分の思想としての新陰流を伝えようとしていたのではないだろうか。

補遺：『柳生流新秘抄』に「丸橋」として、丸木橋の上では^{ひとえみ}単身にし、打ち込み時には習い覚えた全てを「丸橋一つに束ねて」、中墨へ直に打ち込むことという記載があるが、転変しながらも中墨に打ち込むことの大事と軌を一にしている。転変することと、中墨を打つことは、「燕飛」でも「三学」でも不可分なことであるが、中墨を打つことの究極性を強調するため、敢えて所作をいささか誇張拡大した形で小転、大転、是極、合ッシ打ちなどの勢法として、現行の柳生新陰流は伝えていられる。

「武道健康論」研究 — 健康生成論と伝統的身体論を手掛かりに —
— アクティブ・エイジング、ヘルシー・エイジングに期待される武道体験 —

研究代表者 石塚正一（国際武道大学）

共同研究者 小林啓三（国際武道大学）

阿久津洋巳（岩手大学）

園部豊（日本体育大学）

地球規模の人口高齢化にともない WHO は「ヘルシー・エイジング」「アクティブ・エイジング」政策を提言している。そうした中でアントノフスキーの健康生成論が注目されており、スウェーデンやベルギーでは健康生成論に基づいて高齢者へのアプローチが研究されている。他方、「武道健康論」研究においては、健康生成論の首尾一貫感覚と武道体験の関係について論じてきた。その成果を要約すると、「首尾一貫感覚はスポーツよりも武道の選手、武道家が高いこと」、「青年よりも壮年や老年が高く、年齢ともなって上昇していること」を明らかにした。そこで高齢化社会において武道がいかなる貢献を果たしうるかを明らかにするために、健康運動を自主的に行う高齢者を対象に首尾一貫感覚を調査し、同年齢層の武道高段者、武道家との比較を行った。その結果、健康運動を自主的に行っている集団よりも武道高段者、武道家の首尾一貫感覚が高いことが明らかになった。これは高齢者の健康維持や生活の質を高めるうえで武道体験が有益であり、高齢者の「ヘルシー・エイジング」、「アクティブ・エイジング」に貢献する身体運動であることを示している。

「武道の国際化をめぐる諸問題」座談会

研究代表者：柏崎克彦（国際武道大学）

共同研究者：魚住孝至、大矢稔、松尾牧則、立木幸敏、岩切公治、

井下佳織、矢崎利加（以上、国際武道大学）、

木村恭子（全日本なぎなた連盟）

ゲストスピーカー：アレキサンダー・ベネット（関西大学）、

マーヤ・ソリドワール（明治大学）

平成21年より始まった本プロジェクトでは、共通テーマについて各武道の立場から論考をまとめてきた。本年度は最終年度になるので、ゲストスピーカーを交え以下のようなテーマについて、座談会形式で総括を行うことにした。座談会の場所は、国際武道大学9号館会議室、日時は、2013年3月9日15時～18時である。

なお、本記録は座談会の録音を文字に起こしたもので、各発言者が確認をおこなった。

I. 各武道の国際化の現状と問題点

- (1) 柔道に関して、(2) 空手道に関して、(3) 合気道に関して、(4) 剣道に関して、
- (5) 外国剣道家の立場から、(6) なぎなたに関して、(7) 弓道に関して

II. 武道の国際化にともなう諸問題

- (1) 指導者と段位の問題、(2) 武道と宗教の問題、(3) 武道の国際化への取り組み、
- (4) 最も国際化した柔道の評価をめぐって、(5) 競技レベルと審判法の問題、
- (6) 外国人武道家に学ぶもの

III. 武道の国際化に対する国際武道大学の役割

おわりに. グローバル時代の武道の展望

韓国大学男子テコンドー選手の無酸素性パワーと 等速性下肢筋力に関する研究 —組手選手と型選手の比較を通して—

金 芝美（国際武道大学研究員）、林 淳吉（龍仁大学）

本研究は組手選手と型選手における無酸素性パワーと等速性下肢能力の比較より、テコンドー選手の競技力向上や障害要望の基本資料として提供することを目的に本研究を始めた。

このために被験者は大韓テコンドー協会に登録されている Y 大学の選手で、テコンドーの競技歴 5 年以上、段位は 3 段以上の男子選手とした。最近捻挫・骨折などの医学的負傷の無い 58 名とした。全員、利き脚は右脚であった。組手選手 34 名（年齢 19.6 ± 0.9 歳、身長 176.2 ± 5.5 cm、体重 69.4 ± 6.2 kg）、型選手 24 名（年齢 19.2 ± 1.1 歳、身長 174.8 ± 4.0 cm、体重 67.7 ± 5.1 kg）であり無酸素性パワー、等速性能力を測定した。

テコンドー組手選手と型選手は体重当たりの最大パワーを除く、すべての測定項目で有意な差がみられなかった。このような結果は組手選手と型選手の練習方法や練習時間起因する明らかではない。今後さらに、体系的かつ持続的な組手選手と形選手の研究と下肢筋力向上に対する研究が必要である。